

第15回日本在宅看護学会学術集会への誘い

日本在宅看護学会理事長・山田雅子氏と、集会長を務める藤野泰平氏に聞く

第15回日本在宅看護学会学術集会が、2025年11月29日（土）・30日（日）の両日、ウインクあいち（名古屋市）にて開催されます。開催に先立ち、日本在宅看護学会理事長・山田雅子氏と、本学術集会の集会長を務める藤野泰平氏が、その理念と特色について語りました。

「在宅」は、患者が日常へと戻る場であり、療養生活の基盤そのものです。看護は今、病院での支援にとどまらず、その先にある人生の質を支える視野を必要としています。その視座を深めるためにも、本学術集会への参加は大きな意義を持つでしょう。

（本誌編集室）

在宅看護を「社会インフラ」として

藤野 今回の学術集会のテーマは、「社会インフラとしての在宅看護」です。私は、訪問看護が暮らしの基盤として社会

に根づくために2つのことが重要だと考えています。1つは、地域住民の潜在的なニーズに応えること。療養者は「こうしたい」と思っている、口にはできないことが多くあります。その思いに応えていくのが訪問看護の本質です。2つ目は、人口の少ない地域にもケアが等しく届く仕組みをつくることです。私は人口2千人ほどの島で育ち、当然医療へのアクセスは限られていました。都市部には資源が集中していますが、日本のどこにいても同じように看護を受けられる社会を実現したい。だからこそ、「社会インフラ」という言葉を用いました。

山田 なるほど。電気やガス、水道と同じように生活に欠かせないものとして訪問看護を位置づけているんですね。訪問看護ステーションは病院に比べて小規模に立ち上げられる点が強みですが、人口が少ない地域では事業継続の観点から難しい現実もあります。ただ、必ずしも制度に沿った形でなければならないわけではありません。地域の特性に応じて柔軟に看護の形を変え、暮らしを支えることが大切だと思います。例えば、「コミュニティナース^{註1}」という取り組みがあります。地域に住む看護師が日常生活の中で住民と関わり、医療や介護が必要なときに相談や受診につなげる。看護師が1人の住民として地域に存在することが、信頼関係を築くうえで非常に有効です。

藤野 重要なのは「看護師である前に1人の生活者である」という視点ですね。

山田 ええ。看護師は情報を聞き出してアセスメントしようとしがちですが、“鎧”を脱いで人として向き合えるかどうかが大事です。

「看護師」ではなく「1人の人」として

藤野 私が運営する「みんなのかかりつけ訪問看護ステーション」では、利用者さんの人生の物語を聞き書きし、エッセイのようにまとめる取り組みをしています。その過程で、利用者さんと一緒に思い出の場所を訪れることもあります。すると、利用者さんの「生きたい」という気持ちが高まり、心身にもよい変化が生まれ、これはまさにケアの本質的な営みだと考えています。スタッフも看護師というより、1人の人として接しているのです。

山田 利用者に向き合い、自分の経験を振り返ることは看護師自身の成長にも不可欠です。さらに、そうした活動を通じてスタッフが地域のお祭りや行事に自然と参加するようになるのもよい傾向だと思います。以前、看護管理者を対象とした調査を行ったことがあるのですが、「オフの時間も看護師でいられるか」という議論がありました。今の時代に求められているのは、勤務のオン・オフを超えて人々を支える存在で居られるかどうか、かもしれません。

現状は指示書があって初めて自宅を訪問できますが、療養者側から「訪問看護を利用したい」と言えばかなう、そうした体制が整ってこそ「インフラ」と言えますね。

藤野 個人のケアから社会の課題へ目を向ける力が必要です。そうでなければ、医療機関につながらない人は支援の網目から漏れてしまうことになります。結果として、看護の価値が限定的な社会になってしまいます。



藤野泰平（ふじのやすひら）氏

2006年名古屋市立大学看護学部卒。聖路加国際病院で救命医療やICUなどを経験する。訪問診療クリニックや訪問看護ステーションでの勤務を経て、2014年に株式会社デザインケアを設立し「みんなのかかりつけ訪問看護ステーション」を開業。全ての人が豊かに暮らせる社会の実現を目指し、現在は全国に36事業所を出店している（2025年6月現在）。第15回日本在宅看護学会学術集会で集会長を務める。愛媛県松山市出身。

表 第15回日本在宅看護学会学術集会の開催概要

テーマ 社会インフラとしての在宅看護——在宅看護は、社会を変えられるのか？

学術集会長 藤野泰平氏（みんなのかかりつけ訪問看護ステーション）

会期 2025年11月29日（土）、30日（日）

会場 ウィンクあいち（名古屋市）

ウェブサイト <https://janhc15th.site-s.jp/>

注目プログラムと新しい認定制度

藤野 今回注目してほしいのは、特別講演「社会インフラとしての在宅看護を語る」です。馬庭恭子先生（元広島市議・元地域看護専門看護師）にご登壇いただき、地域看護の現在地と未来をお話いただきます。馬庭先生の豊かなご経験から、看護師が個人ケアの枠を超えて社会全体をどう支えるか、想像力を広げるヒントが得られるでしょう。

山田 私は、交流集会「日本在宅看護学会が新しい認定教育をはじめます」を推したいです。2027年度から新たに「地域の暮らし支援看護師（CCLSN）」制度を創設します。訪問看護認定看護師の制度では、1年間で特定行為研修を含む内容を学ぶのが難しく、在宅看護の特性に十分対応できませんでした。新制度では、知識と技術を学び、事例検討を繰り返しながら看護を言葉にする力を磨きます。経験年数は問わず、受講できます。

藤野 経験の浅い人からベテランまで幅広く参加できるのは意義深いですね。看護を語り合い、価値を見いだす場になると期待しています。

学会の役割と参加の意義

山田 学会とは、自らの未熟さを知り、看護の本質を語り合う場であると思います。私が臨床看護師をしていた頃は、大先輩から「技術がなっていない」「頭でっかちになっている」といった指摘を受けることが成長の糧となりました。今の職

場では得難いそのような学びが、学会にはあります。

藤野 私自身、学生時代から学会に参加し、発表を聞いたら必ず質問することを心掛けていました。日本看護管理学会には、19歳からずっと参加し続けています。発言を重ねることで人に覚えてもらえ、自分の成長にもつながりました。小規模事業所で働く看護師は日常的に語り合う相手が限られがちです。だからこそ、学会は看護を楽しく語れる人と出会い、刺激を得る場となるのです。

山田 学術集会は、在宅看護に興味を持つ誰もが参加できる学びと交流の場です。病院勤務の方も歓迎です。

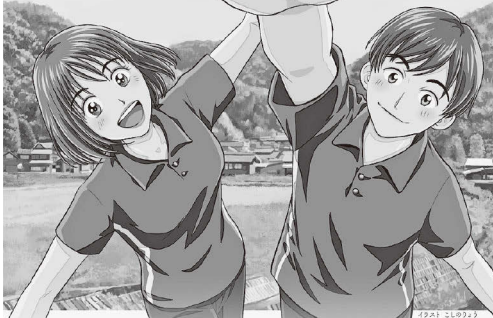
藤野 今回の学術集会ではSNSでの発信も強化し、より多くの方とつながれるよう準備しています。学会を通じて、1人でも多くの看護職と出会えることを楽しみにしています。

【註】 <https://community-nurse.jp/qa>

第15回日本在宅看護学会学術集会

社会インフラとしての在宅看護

～在宅看護は、社会を変えられるのか？～



2025.11.29(土) 30(日) 現地開催・オンデマンド配信

場 所 **ウィンクあいち**
名古屋市中村区名駅4丁目4-38

集会長 **藤野泰平**
株式会社デザインケア / みんなのかかりつけ訪問看護ステーション 代表取締役・看護師

演 題 2025.4.1(火)～6.10(火)
後 援 公益社団法人愛知県看護協会・一般社団法人全国訪問看護事業協会・公益社団法人日本訪問看護財団

参加費

登録期間	4月1日～8月31日	9月1日～12月16日
会員	9000円	11000円
非会員	11000円	13000円
学生	1000円	1000円

事務局 みんなのかかりつけ訪問看護ステーション janhc15.info@kakaritsuke.co.jp

運営事務局 エイトカラーズ合同会社 janhc15th.eightcolors.co.jp

学術集会 ラグジュアリー 会場



山田雅子（やまだまさこ）氏

1986年聖路加看護大（当時）卒。新卒時から聖路加国際病院公衆衛生看護部で訪問看護等に従事する。セコム在宅医療システム株式会社、セコムディック病院看護部長、厚労省医政局看護課在宅看護専門官を経て、2007年より聖路加国際大学大学院看護学研究科教授。日本在宅看護学会理事長。地域看護専門看護師。現在は聖路加国際大学リカレント教育部長を兼務し、看護職の生涯教育に携わっている。

写真©安部俊太郎